

尾崎永奈（日本女子大学・院）

「1920年代アメリカ出版文化と " 'outline' books"」

### 【要旨】

本論文では、1920年代のノンフィクション部門のベストセラーにみられる一つの傾向とその文化的・社会的背景を主に出版業界の動向に着目しながら分析を行った。

「読みやすさ／わかりやすさの追求」は1920年代の出版文化を説明する一つのキーワードである。*Reader's Digest* や *Time* などこの時期に創刊された雑誌が要点をわかりやすくまとめた記事を売りにしていたということも、そうした流れをくむ一つの動向とみることができる。しかし「読みやすさ」「わかりやすさ」を求める動きは雑誌に限られたものではなく、ノンフィクション書籍の出版においてもそのような傾向が見られた。1920年のH.G.Wellsによる *The Outline of History* 出版以降、アメリカでは人文学や自然科学の学術的なトピックについて、その歴史や理論を概説した書籍が続々と出版され、ベストセラーとなった。1921年にはHendrik Willem Van Loonが *The Story of Mankind* のなかで原始時代からの西洋文明の歴史を紐解き、翌年にはArthur Thompsonによる *The Outline of Science* が出版された。1926年に出版された哲学者Will Durantによる哲学入門書 *The Story of Philosophy* は小規模出版社から小冊子として出版されたものが人気を博し書籍化されたという経緯を持つ。これらの概説書は大勢の執筆者からなる百科事典とは異なり、一人の著者によって書かれている。また当該分野の研究者・専門家だけでなく専門知識を持たぬ者にも分かるよう配慮されている点も大きな特徴である。上述の書籍の他にも同様の書籍が様々な出版社から出版され、その多くがベストセラーランキングのノンフィクション部門において数年連続で上位を占めていたことは、この類の書籍が一つの「現象」を形作っていたことを示しているといえよう。

このような出版傾向についてアメリカ出版史や文化史の観点から言及する文献は一定数存在するものの、その多くが、こうした概説書の流行が大衆のどのような意識・欲求を反映しているかという点を補足的に述べるにとどまっている。本論では、出版業界誌 *The Publishers' Weekly* (*PW*) をはじめとする一次史料の分析をもとに、そのような新しいノンフィクションを生みだした土壌が第一次世界大戦後の教育改革熱の高まりと、そうした機運にビジネス拡大の機会を見出そうとした出版界の野心にあるという点を指摘した。そのうえで、これらの本の出版を通じて出版界が、その分野の専門家と専門知識を持たない一般読者の媒介役となった過程を分析した。

1919年頃から、大戦後の“平和”な社会をどのように構築していくかという議論がなされるなかで、教育改革は重要課題の一つとされた。それまでの学校・大学教育に対する改革に加えて、教育機関外での成人教育の充実を求める声もあがった。実際、カーネギー財団による経済的な支援の効果もあり、図書館での成人教育プログラムや労働者向けの教育プログラムなどがこの十年間を通じて発展を遂げた。こうしたなかで出版業界もまた、「教育」をテーマとした議論を *PW* 誌上で展開し、教育と自らの出版ビジネスの間にどのような接点を見出しうるかを検討するようになった。その一方で出版業界は、「書籍」の新たな読者拡大の方法を模索していた。1890年代頃からの印刷技術向上により、大量印刷によって生産された廉価の刊行物が市場に大量に出回るようになった。読み物の選択肢が増えた結果、新聞や雑誌の購読者数が増える一方で、比較的価格の高い書籍の売り上げは伸び悩むという現象が起こったのである。新聞や雑誌を購読する習慣が

あるにもかかわらず書籍を購入しない者たちを、いかに惹きつけるか。この点をめぐり「出版社は専門的で高尚な書籍を中心に出版する“ハイブラウ”な傾向を脱し、もっと“普通の”読者の存在に目を向けるべきでは」「文学に通じている一部の人々だけでなく、“平均的な”読者が手軽に知識を得られる本をもっと出版すべきではないか」といった意見が *PW* 誌上でみられるようになった。

こうした「高尚でエリート的な出版傾向から脱し、より多くの層を惹きつける読み物の出版を心がけるべきである」との出版界の姿勢と、アメリカ社会における教育改革への機運を反映した形で、出版界は「書籍を通じての成人教育」への参入を試みるようになった。それが教育への純然たる奉仕の精神によるものというよりは、ビジネス拡大の足掛かりの一つであったという点は否定できない。しかしいずれにせよ出版業界は、この教育改革の勢いに乗る形で「書籍を通じた教育」に意識を向けることになったのである。結局のところ、一連の概説書の出版は第一次世界大戦後の教育改革熱や成人教育への注目の高まり、そして出版業界のビジネス拡大の野心を反映した、この時代ならではの一種の社会的・文化的・知的現象だったのである。